様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６２７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３８７

研究課題名（和文）引用の文化史ーフランス中世から20世紀文学における書き直し（リライト）の歴史

研究課題名（英文）The Culture and History of Quotation : a Study on the Act of Rewriting in French Literature from the Middle Ages to the 20th Century

研究代表者
篠田　勝英（SHINODA, Katsuhide）

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：２０１２９８９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：フランス文学を対象に、剽窃・引用・書き直し（リライト）という観点から、個別の作家・作品の営みをミクロに検討し、地理的・歴史的に条件づけられる枠組みとの葛藤を明らかにした。2回の学術講演会、1回の学術シンポジウム、書き直し（リライト）をめぐる2冊の論集等をとおして、独創と模倣、創作と書き直し（リライト）の関係の歴史的推移に注意しながら、作家や作品固有の引用の詩学を各時代の状況における偏差として位置づけ、事象の理論的追求と歴史的パースペクティヴの構築、さらに作家・作品の個別的理解を、相互に有機的に結びつけることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　フランス文学研究において、剽窃や引用・書き直し（リライト）の問題をめぐっては、作品の創作過程で参照・借用された出典を確定する文献学的研究と、複数のテクストの関係を考察する理論的研究とに分かれる傾向があった。本研究は個々の作品の生成に実証的に寄り添いながら、中世から20世紀という歴史的視点を導入し、総合的な「引用の文学史」の構築を目指した。今日、著作権と引用、剽窃や二次創作の問題はかつてない注目を集めているが、引用、剽窃、創造的模倣といった古くて新しい事象を、ミクロとマクロの双方の視点を含んだ新たな歴史的パースペクティヴのもとに示すことで、新たな検討材料をもたらすことも目的とした。

研究成果の概要（英文）：Taking French literature as our research field, this project aimed at establishing a historical perspective on the phenomenon of secondary use of literary material. We did this by conducting micro-level analyses of individual authors and their works, while also identifying the conflicts in them caused by the geographically and historically conditioned frameworks of literary production. Through two sessions of specialist lectures, one academic symposium devoted to this problem, and two volumes of essays on the topic of rewriting, we traced the historical changes in the relations between originality and imitation, between original composition and rewriting, and positioned the “poetics of quotation” proper to each writer and their work as deviations in the literary norms of their era.

研究分野：人文学

キーワード：書き直し（リライト）　引用　間テクスト性　フランス文学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

フランス文学研究において、剽窃や引用・書き直し（リライト）の問題をめぐっては、従来、作品の創作過程で参照・借用された出典を確定する文献学的研究と、複数のテクスト同士の関係を考察する理論的研究とに分かれる傾向があった。出典研究はしばしば古典的な文献調査の手法をとるが、それぞれの作家・作品が過去のいかなる作品を、どのように引用・模倣し、あるいは改変したのかを確定する作業は、作品研究の根幹であり続けている。他方、理論的研究は、1969年にジュリア・クリステヴァが「間テクスト性」という用語を提唱して以来、フランス語圏に限っても、ミカエル・リファテールやローラン・ジェニーなどの理論構築の試み、ジェラール・ ジュネットによる模倣やパロディに関する類型化の試み、あるいはアントワーヌ・コンパニオンの引用論、ミシェル・シュネデールによる剽窃の歴史的・精神分析的解釈、さらには「作品の記憶」を強調したティフェーヌ・サモヨやソフィー・ラボー、ナタリー・ピエゲ＝グロの研究など、多くの成果を生んできた。しかし近年では特定の作家やテーマ、ジャンルに焦点を当てての検証も現われるようになってきたものの、文献学的調査と理論的考察を統合した上で、実証性に裏打ちされた歴史的パースペクティヴを提示するような研究は、国内外を見ても十分とは到底いえない。文献学的調査は個々の作家研究の枠内にとどまることが多く、理論的著作は「すべて書かれたものは引用の織物である」（クリステヴァ）という言葉に示されるように、作家や時代の固有性や歴史性を捨象する傾向が強かったからである。方法論的にも新たな整備が必要であるという強い思いを共有する研究代表者・分担者によって、本研究は構想された。

２．研究の目的

書き直し（リライト）の問題は、独創性の評価・価値づけと表裏をなし、歴史的・地理的条件に強く規定される。本研究の対象であるフランス文学に限っても、古典作品の引用・翻案・換骨奪胎、同時代作品からの借用・転用・パロディ化等が自在に繰り広げられた中世から、規範としての古典作品の模倣・引用・翻案に大きな価値を見いだすルネサンス期・古典主義時代を経て、借用が剽窃として徐々に告発されるようになり、「独創性」の追求とそれに伴う「著作権保護」の考え方が広まっていくロマン主義時代以降にいたるまで、独創と模倣、創作と書き直し（リライト）の関係は、大きく変化している。

1960年代以降、剽窃や引用、書き直し（リライト）をめぐっては、さまざまな理論的な検討がなされてきたが、すべての作品へと適用可能な普遍的理論の構築を目指す傾向が強く、個々の作家・作品の置かれた歴史的・地理的条件は軽視されるきらいがあった。しかし剽窃・引用・書き直し（リライト）を説明しうる、理論化や類型化がある程度可能だとしても、事象そのものの位置づけが時代や場所によって変化するなら、そうした理論や類型は歴史的あるいは地理的に限定された条件と関連づけてはじめて有効性が担保される面がある。本研究が目指したのは、フランス文学にコーパスを絞った上で、個別の作家・作品の営みをミクロに検討し、剽窃・引用・書き直し（リライト）といった事象について、普遍的な理論を一足飛びに打ち立てるのではなく、まずは歴史的状況に条件づけられる相対的な枠組みとの関わりにおいて、検討することであった。独創と模倣、創作と書き直し（リライト）の関係の歴史的推移に注意する一方、作家や作品固有の引用の詩学を各時代の状況における偏差として位置づけ、事象の理論的追求と歴史的パースペクティヴの構築、さらに作家・作品の個別的理解を、相互に有機的に結びつけることを試みた。

３．研究の方法

本研究は研究代表者を篠田勝英（中世・16世紀）が、研究分担者を、越森彦（18世紀）、辻川慶子（19世紀前半）、海老根龍介（19世紀後半）、福田耕介（20世紀）の4名がつとめたが、フランス以外の文学、さらには美術、演劇、映画、漫画といった隣接分野にまで射程を広げ、剽窃や引用、書き直し（リライト）といった事象を考察するためにいかなる論点設定が可能かを、チームとしてなるべく広い視点から方法論的に検証するのと平行して、各人がフランス文学の自らの専門領域において具体的作品や言説を個別に調査することで、理論的追求と歴史的変遷の把握、個々の作家・作品の個別的検討の統合を目指した。

まずは初年度である平成27年度に、海老根と辻川がコーディネーターとなり、白百合女子大学大学院にてリレー講義「芸術におけるリライト」を企画・運営し、学内外のさまざまな専門の研究者に論じてもらうことで、問題意識の共有をはかった。同時にこの共通の問題意識にもとづいて、研究チームのメンバーが調査・研究を進めたが、その際、具体的な作家や作品の分析をとおして、各自が担当する時代の文脈を浮き彫りにすることを、共通の方針とした。

近年、フランス国立図書館のサイト Gallica 等に多くの1次文献が PDF 版等でアップされているが、書き直し（リライト）の問題を考える際には、典拠の調査において、実際にどのエディションが参照されたのかといった細緻な文献学的検討をないがしろにできないため、出版物の形で資料を入手しやすい20世紀を対象とする福田をのぞき、他の4名の研究にはフランス国立図

書館等での現地調査が不可欠であった。本研究費から支出した短期の現地調査は、ロマン主義時代のフランスにおける剽窃や引用の位置づけの再検討を行った辻川が 2 回、18 世紀の作家・思想家ジャン＝ジャック・ルソーによる書き直し（リライト）の意図をそれがなされた文脈の再構成をとおして検証した越が 1 回、19 世紀中葉の詩人シャルル・ボードレールのルソー作品の書き直し（リライト）をやはり同時代の社会的・芸術的文脈と関連づけながら考察した海老根が 1 回の計 4 回であるが、本研究費からは支出しなかったものの、中世と 16 世紀フランスにおける剽窃・引用・書き直し（リライト）のありよう全般を検証した篠田も、研究期間中 3 回の短期現地調査を実施した。さらに越と辻川は短期調査に加え、研究休暇を利用して 1 年間パリに滞在して、継続的な調査を行った。

研究チームだけで網羅できない時代については、学外のフランス文学や歴史の研究者を招き、2 回の学術講演会と 1 回の学術シンポジウムを開催し、意見交換を複数回にわたって行うことで、個々の文学作品の生成という具体的な現象の実証的検討を、中世から 20 世紀を網羅する通時的パースペクティヴの確立へと繋げ、総合的な「引用の文学史」を叙述することを目指した。

４．研究成果

研究初年度の平成 27 年度に白百合女子大学大学院において行った「芸術におけるリライト」の内容を、翌年、同タイトルの講義録として出版した。講義を踏まえて研究チームで議論した成果を海老根が序文にまとめたほか、フランス中世の作品『薔薇物語』をテーマとした篠田の論考、19 世紀の作家ネルヴァルにおける引用をテーマとした辻川の論考を含む 12 本の論考を収録している。「原作」や「作者」といった観念が曖昧模糊としていた中世から、「世界文学」という概念が定着し、日本語の小説がほんの 1 ヶ月後には英語で流通してしまうこともある 21 世紀まで、詩、演劇、歴史叙述といった伝統的文芸から近現代小説、さらには映画、漫画、絵画にいたる隣接ジャンルまで、故事や神話、古典など文化財産の「書き継ぎ」・「書き直し」から、他者の言葉のさまざまな取り込みや、言語・ジャンルを跨いだ異文脈への移し替え、自作への批評的再介入を伴う創作原理としての書き直し（リライト）まで、多様な国・時代、多様なジャンル、多様な形の書き直し（リライト）を対象にし、研究主題としての射程を俯瞰的に検証した論集である。

このリレー講義と講義録で得た方法論的知見にもとづいて、チームの構成員が個別に行った研究の成果は以下のとおりである。研究代表者の篠田は、フランス 16 世紀に書かれた「日記」や作家マルグリット・ド・ナヴァールの作品の翻訳・註解・資料探索をとおして「書き直し（リライト）」の考察を深める一方で、作者･作品の概念が近代以降とまったく異なるヨーロッパ中世という時代を「オリジナルのない時代」として捉え、このタイトルのもとにおもにフランスの中世文学作品の構成原理を解明する論考を、『引用の文学史』に発表した。武勲詩、ロマンばかりではなく説話と総称される物語群についても、書き直し（リライト）の視点の導入により、ジャンルの位置づけ、個々の作品の生成過程等に新たな光を当てることができた。

18 世紀を担当した越は、『エフライムのレヴィ人』（1781）、『告白』（1782、1789）という、ジャン＝ジャック・ルソーの 2 つの作品を、書き直し（リライト）の観点から考察した。旧約聖書の「士師記」をリライトした前者については，従来の説に反し、ルソーがレヴィ人に自分の姿を投影することは自己像の再構築という観点からはむしろ自損行為であることを『引用の文学史』収録の論考で明らかにし、後者については、子供を遺棄した際の状況を報告するルソーの語り方が、カラス事件でも活躍した当時の有名弁護士であるロワゾー・ド・モレオンの訴訟趣意書に強く影響を受けていることを、2018 年に発表した仏語論文で示した。いずれも書き直し（リライト）の機能を、書かれた状況の丁寧な検証をとおして明らかにしたものである。ほかに上記考察の背景をなす、18 世紀の知的状況をめぐる論考も発表している。

19 世紀前半を担当した辻川は、おもにロマン主義の作品を対象に、小ロマン派（ミュッセ、ゴーティエ、ネルヴァル）によるロマン主義的テーマの書き直し（リライト）と、歴史的・政治的テーマの書き直し（リライト）という 2 つの観点から研究を進めた。前者に関しては、小ロマン派の書き直し（リライト）の持つ歴史性と両義性を分析し、『引用の文学史』を含む 3 冊の共著書などで成果を発表し、後者に関しては、歴史叙述の問題、および政治、系譜、宗教などのテーマの書き換えの問題を同時代の歴史的文脈との関連で分析し、仏語共著書 2 冊などで論じた。

19 世紀後半を担当した海老根は、1860 年代にボードレールがルソーの作品を書き直し（リライト）として発表した散文詩を、リライトと寓意の多層的な重ね合わせの関係に焦点を当てて分析した。この成果は『引用の文学史』に発表されたが、ほかに、この書き直し（リライト）の前提となる同時代のボードレールの美学と存在論の関わりを論じた論文を著したほか、19 世紀後半における書き直し（リライト）のありようの具体的分析を含む成果として、論集『長編小説の扉』にエミール・ゾラをめぐる論考を掲載し、またヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』の「解説」も執筆した。さらに書き直し（リライト）を原理的に考察するため、文化・文学の異文脈への移し替えという観点から、フランス詩と日本文学との関わりを安東次男の作品を例に論じた。

20 世紀を担当した福田は、フランソワーズ・サガンを「18 歳の魅力的な怪物」と評したフランソワ・モーリヤックの論説が、モーリヤックが表現したかったことから切り離されて、サガンのデビューを語るときに必ず引用されるものになった経緯を丁寧に跡づけた論考を『引用の文学史』に発表する一方、これら 2 人の作家それぞれの特質や両者の関係に関する論考も執筆し

た。さらにモーリヤック作品の日本における需要という観点からも、書き直し（リライト）の問題に迫った。

研究チーム 5 名の以上の研究成果を、歴史的パースペクティヴの構築へと繋げる上での間隙を埋めるために、さらに外部の研究者を招いた学術講演会を 2 回、学術シンポジウムを 1 回開催した。1 つ目の講演会は平成 27 年 5 月 29 日に開催したスイスのヌーシャテル大学教授ダニエル・サンシュ氏による「リライトとパロディ」であり、2 つ目の講演会は平成 29 年 3 月 10 日に開催した 2 本の発表とコメントからなる「ジャンヌ・ダルクとリライト」である。シンポジウムは、平成 30 年 3 月 23 日に「引用の文化史 ― フランス中世から 20 世紀文学における書き直し（リライト）の歴史」という総題のもと行われ、12 本の研究発表があった。研究代表者ならびに分担者の個別研究、2 つの講演会とシンポジウムすべての成果をまとめ、研究全体を総括する序文（海老根）とあとがき（篠田）を付して、平成 30 年度に論文集『引用の文学史 ― フランス中世から 20 世紀文学におけるリライトの歴史』を刊行した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）

① Morihiko Koshi : « Le mémoire judiciare et *Les Confessions* de Jean-Jacques Rousseau : scène judiciare et écriture de soi »、『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）（90）、査読有、2018、289－310

② 福田耕介：「ヴァンサン・ペレーズ、遠藤周作、フランソワ・モーリヤックにおける母親の死」、『仏語・仏文学論集』（上智大学フランス文学科）（53）、2018、31－49

③ Ryusuké Ebiné : « Tsuguo Andô et la littérature française »、*AmeriQuests*（13）、査読有、2017、17－20、DOI: https://doi.org/10.15695/amqst.v13i1.4235

④ 福田耕介：「モーリヤックとサガンー肉体における聖と性」、『仏語・仏文学論集』（上智大学フランス文学科）（52）、2017、35－54

⑤ 海老根龍介：「子供・感受性・秩序 －後期ボードレールの美学と存在論」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）（49）、査読有、2016、305－320

⑥ 越森彦 ：「ヴォルテールとルソーにおける悪の問題」、『白百合女子大学キリスト教文化研究論集』（17）、2016、24－45

⑦ Keiko Tsujikawa : « La ’ parodie du sublime : Musset et le romantisme »、 『立教大学フランス文学』（45）、査読有、2016、 143-152

⑧ 福田耕介：「フランソワ・モーリヤック『火の河』における「火」と「水」の接合」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）（49）、査読有、2016、407－421

〔学会発表〕（計 15 件）

① 辻川慶子：「1848 年後と集合性の夢 ― ネルヴァルとウージェーヌ・シュー『民衆の秘密』」、研究会「フランス第 2 帝政期の文学場と芸術美学」、於：立教大学池袋キャンパス、2018 年 9 月 29 日

② 海老根龍介：「幼年期をめぐるリライト ― ルソーとボードレール」、「引用の文化史 －フランス中世から 20 世紀文学における書き直し（リライト）の歴史」、於：白百合女子大学、2018 年 3 月 23 日

③ 越森彦：「エートスの構築手段としてのリライト：ルソー『エフライムのレヴィ人』再考」、「引用の文化史 －フランス中世から 20 世紀文学における書き直し（リライト）の歴史」、於：白百合女子大学、2018 年 3 月 23 日

④ 辻川慶子：「言葉と記憶 ― ネルヴァルにおける引用の詩学」、「引用の文化史 －フランス中世から 20 世紀文学における書き直し（リライト）の歴史」、於：白百合女子大学、2018 年 3 月 23 日

⑤ 福田耕介：「モーリヤックとサガン ―「18 歳の魅力的な怪物」をめぐる引用とリライト」、「引用の文化史 －フランス中世から 20 世紀文学における書き直し（リライト）の歴史」、於：白百合女子大学、2018 年 3 月 23 日

⑥ Judith Lyon-Caen et Keiko Tsujikawa：« Une réflexion sur autorité politique et autorité littéraire autour de l’amendement Riancey (16 juillet 1850) » 、*Littératures et autorités* (colloque international organisé par GRIHL et Groupe de recherches sur les littéraires et l’historiographie)、於：アンスティテュ・フランセ九州、2017 年 9 月 23 日

⑦ Ryusuké Ebiné：« Reconsidérer l’’enfance’ baudelairienne : esthétique et philosophie de la foule chez le dernier Baudelaire »、*Baudelaire 150 ans après* (colloque international)、於：東京大学本郷キャンパス、2017 年 5 月 28 日

⑧ 海老根龍介：「詩と聖性？：愛・芸術・売春 ― ボードレールをめぐって」、白百合女子大学キリスト教文化研究所研究会「日常の中の聖性」、於：白百合女子大学、2017 年 2 月 28 日

⑨ Morihiko Koshi：« Le mémoire judiciare comme modèle du dispositif énonciatif des *Confessions* »、Séminaire du Centre Rousseau、於：Université de Paris IV (France)、2016 年 12 月 9 日

⑩ 辻川慶子：「系譜と詐称 ― レチフ、ネルヴァル、シューと遺産創生の物語」、「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌを読む ― 記憶・系譜・道徳」（日本フランス語フランス文学会 2016 年度秋季全国大会ワークショップ）、東北大学川内南キャンパス、2016 年 10 月 23 日

⑪ Kosuké Fukuda : « L'influence littéraire de François Mauriac au Japon : Tatsuo Hori et Shûsaku Endô face à *Thérèse Desqueyroux* »、*La Vie des écrits* (colloque organisé par la Société internationale des Études Mauriaciennes)、於：Centre François Mauriac de Malagar (France)、2016 年 10 月 21 日

⑫ Ryusuké Ebiné：« Andô Tsuguo et la littérature française »、*Cultural Modernism IV : Baudelaire in Japan*、 於：Vanderbilt University (Nashville USA)、2015 年 11 月 5 日

⑬ 海老根龍介：「ボードレールにおける芸術とモラル」、「文学と悪とモラル」（日本フランス語フランス文学会 2015 年度秋季全国大会ワークショップ）、於：京都大学吉田キャンパス、2015 年 11 月 1 日

⑭ 越森彦：「ヴォルテールとルソーにおける悪の起源 ― ポウプ流オプティミズムをめぐって」、「文学と悪とモラル」（日本フランス語フランス文学会 2015 年度秋季全国大会ワークショップ）、於：京都大学吉田キャンパス、2015 年 11 月 1 日

⑮ Keiko Tsujikawa: « Musset et le romantisme »、*Repenser le romantisme français*、於：立教大学池袋キャンパス、2015 年 10 月 22 日

〔図書〕（計 11 件）

① 篠田勝英、海老根龍介、辻川慶子、越森彦、福田耕介、伊藤玄吾、秋山伸子、嶋中博章、北原ルミ、坂本さやか、彦江智弘、千葉文夫、池田潤、村中由美子、三ツ堀広一郎、ダニエル・サンシュ：『引用の文学史 ― フランス中世から 20 世紀文学におけるリライトの歴史』、水声社、2019、374p.

② Gabrielle Chamarat, Sylvain Ledda, Jacques-Remi Dahan, Michel Brix, Keiko Tsujikawa, Filip Kekus, Adriana Chimu Harley, Sarga Moussa, Henri Bonnet, Philippe Destruel, Pierre Laforgue, Guy Barthèlemy, Françoise Sylvos, Bertrand Marchal, Sylvie Lécuyer, Corrine Bayle, Jean-Nicolas Illouz：*Nerval écrivain, Hommage à Jacques Bony* (Études nervaliennes et romantiques XV)、Presses Universitaires de Namur、2019、282p.

③ 井上隆史、安蒜貴子、海老根龍介、大塩真夕美、佐藤淳一、鈴木貞美、鈴木智之、田尻芳樹、富岡幸一郎、花崎育代、山中剛史：『長編小説の扉』、弘学社、2018、137p.

④ ヴィリエ・ド・リラダン：『未来のイヴ』（訳：高野優、解説・年譜：海老根龍介）、光文社古典新訳文庫、2018、827p.

⑤ Gabrielle Chamarat-Malandain, Jean-Nicolas Illouz, Mireille Labouret, Bertrand Marchal, Henri Scepi, Gisèle Séginger, Keiko Tsujikawa, etc. ：*Gérard de Nerval, histoire et politique*、Classiques Garnier (Paris)、*Gérard de Nerval, histoire et politique*、2018、434p.

⑥ 野呂康、中畑寛之、嶋中博章、杉浦順子、森本淳生、辻川慶子他：『GRIHL―文学の使い方をめぐる日仏の対話』、吉田書店、2017、388p.

⑦ 伊藤進、平野隆文、宮下志朗、斎藤広信、篠田勝英、高橋薫：『フランス・ルネサンス文学集 3 ：:旅と日常と』、白水社、2017、570p.

⑧ 伊藤進、平野隆文、宮下志朗、岩根久、荻野アンナ、篠田勝英、鍛治義弘、田中聰子、濱田明：『フランス・ルネサンス文学集 2 ：笑いと涙と』、白水社、2016、612p.

⑨ 海老根龍介、辻川慶子、篠田勝英、日置貴之、笠間直穂子、北村昌幸、畠山寛、秋草俊一郎、塩塚秀一郎、緑川眞知子、河本真理、小山太一、福田美雪：『芸術におけるリライト』、弘学社、2016、224p.

⑩ 森本淳生、堀尾耕一、桑瀬章二郎、片岡大右、辻川慶子、ジャン＝ニコラ・イルーズ、田中康二、廣瀬千紗子、安田敏朗、中野千律、久保昭博、立木康介、菊池暁、吉澤英樹、尾崎文太、飯田祐子、坂井洋史、大浦康介、尾方一郎、ジル・フィリップ、エステル・フィゴン、塚本昌則、千葉文夫、ウィリアム・マルクス：『〈生表象〉の近代――自伝・フィクション・学知』、水声社、2015、461p.

⑪ Noriko Taguchi, Christian Jouhaud, Katsuya Nagamori, Makoto Masuda, Kenta Ohji, Yoshihiko Sugimoto, Rimpei Mano, Keiko Tsujikawa, Didier Chiche, Gisèle Séginger, Judith Lyon-Caen, Kosei Ogura, Kazuyoshi Yoshikawa, Yuji Murakami, Michael Ferrier, Akihiko Kubo, Nao Sawada, Yasuko Chijiiwa, Shigeru Taga, Patrick Rebollar, Claudie Bernard, Éric Avocat：*Comment la fiction fait histoire, emprunts, échanges, croisements*、Honoré Champion (Paris)、2015、354p.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等：なし

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：海老根　龍介
ローマ字氏名：(EBINE, Ryusuke)
所属研究機関名：白百合女子大学
部局名：文学部フランス語フランス文学科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：40439500

研究分担者氏名：越　森彦
ローマ字氏名：(KOSHI, Morihiko)
所属研究機関名：白百合女子大学
部局名：文学部フランス語フランス文学科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：30509071

研究分担者氏名：辻川　慶子
ローマ字氏名：(TSUJIKAWA, Keiko)
所属研究機関名：白百合女子大学
部局名：文学部フランス語フランス文学科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：80538348

研究分担者氏名：福田　耕介
ローマ字氏名：(FUKUDA, Kosuke)
所属研究機関名：上智大学
部局名：文学部フランス文学科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：30292741

(2)研究協力者：なし